（様式５）　　令和５年度　研究報告書

派遣者番号	Ｒ５Ｋ２４	氏　名	世取山　拓平
研究主題 ー副主題ー	小学校教科担任制の機能及びその影響に関する一考察 ―小学校体育専科を担う中学校教師のライフストーリーから―		
派遣先大学	東京学芸大学	指導担当者	鈴木　聡
所属	港区立港南小学校	所属長	吉川　浩一

キーワード：　教科担任制　小学校体育専科　授業力量　教師観　専門性

要旨：

本研究では、小学校体育専科教師を対象に、小学校体育専科にどのような意味や効果があると捉えているのかという認識について調査し、小学校教科担任制の機能やもたらす影響について明らかにすることを目的とする。

そこで、認識に直接接近する質的研究の内、ライフストーリー法を用いてその内実に迫ることとした。

結果、授業力量の備わった教師が体育専科を務めた場合に限り、その効果を得られることが明らかとなった。本研究においても、専門性が高いとされる教師を配置されることすなわち、質の高い教育が実践されるということは結果として表出しなかった。むしろ体育専科の経験が、授業力量を形成する機会となることが明らかとなり、教師の教師観によって、その職務にやりがいを見出せないことも明らかとなった。

教師の人材不足や専門性の低下が問題視される現状ではあるが、教科担任制の実施方法に関しては、目的や実態、教師の特性等に応じて、入念に検討していくことが求められるであろう。

小学校教科担任制の機能及びその影響に関する一考察
―小学校体育専科を担う中学校教師のライフストーリーから―

M23-3872　世取山　拓平

１研究の目的

これまで日本の小学校では一般的に多くの学校で学級担任制が採用されてきた。そして、小学校体育においても、これまでは学級担任が指導者を担うことが一般的であった。体育授業の指導者に関するこれまでの研究を整理すると、体育授業を学級担任が行うことの効果を明らかにした研究と、特定の目的や優れた体育専科教師のもと取り組まれることによって教科担任制の効果が得られたことを明らかにした研究があり、これらの研究はそれぞれ別の視点から論じられており、お互いの利点をそれぞれの立場から主張しているという研究であった。つまり、小学校体育を教科担任制にすることにどのような意味があるのか、小学校体育を専科教師に委ねることによってどのような影響や効果がもたらされるのかといった視点では十分に検討されていないことが明らかとなった。

そのため、本研究では、保健体育科の教員免許を有し中学校での教職経験のある小学校体育専科教師を対象に、小学校体育専科にどのような意味や効果があると捉えているのかという認識について調査をし、そこから、小学校教科担任制の機能やもたらす影響について明らかにすることを目的とする。

２ 研究の方法

本研究では、認識に直接接近することが可能となる質的研究の内、専科教師が認識する「いまーここ」について潜考するため、半構造化インタビューによるライフストーリー法を用いることとした。なお、分析に際しては、筆者による二重の解釈に加え、論理的飛躍が生じないよう大学教授をスーパーバイザーとし、教職大学院生３名にもトライアンギュレーションとして研究協力を仰いだ。中学校教師を対象とした理由は、技術指導について一定の知識を有すると捉えられていることに加え、小学校教育への固定概念がなく、中学校で教科担任制を経験していることによって、小学校の教科担任制について、より多角的な視点から捉えることができると予想されるからである。更に、小学校の教科担任制についてより概観した視点から捉えることができるよう、中学校での教職経験の方が長い教師を対象とし、特定の学校や研究会の影響が強く反映されないようにも配慮した。

３ 結果と考察

先行研究の検討によって、一定以上の教職経験があり、授業力量の備わった教師が体育専科を務めた場合に限り、その効果を得られるということが明らかとなった。調査の結果としても、専科教師たちが授業への省察を通して始めに感じたのは手応えではなく、課題への直面であった。専科教師たちは、学級担任を受けもっていないため、授業を受けもつ学級の子供たちの性格や個性を把握することが難しい。更に、発達段階への理解やそれに合わせた指導技術が十分ではない場合、授業の基礎的条件を満たすことすら困難であると感じるのである。そして、この課題への直面によって、体育教師として「授業で勝負」しようと自身の意識を改革していったのである。教師たちは専科という授業に専念する役割を担ったことによって、授業力量を向上させたいという意欲を向上させた。そして、授業を改善しようという意欲が高まった専科教師は、部活動指導や学級担任業務がなくなったことに伴う時間の創出、多様なメンターとの出会いや研修の機会という外的側面、体育授

業に対する効力感や体育教師としての自覚という内的側面によって、授業力量を形成させていったのである（図１）。小学校教科担任制に教師の成長を促す機能･効果があったことは新たな知見であるといえよう。そして、これらのことは、教師の専門性の欠如や低下が指摘される体育授業において、小学校教科担任制が教師の専門性を育む、教師教育の機会となり得る可能性を示していると言えるのではないだろうか。

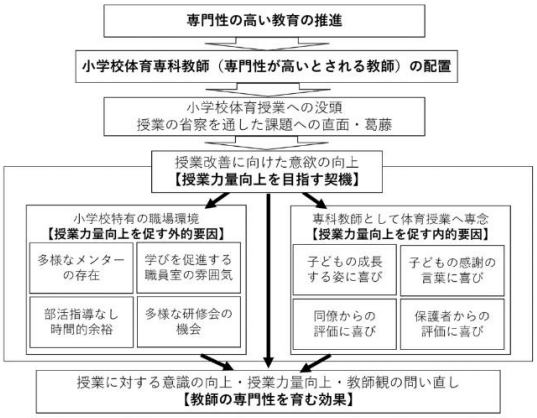

図１　教師としての成長を促す小学校体育専科の意味の構造

また、授業に専念することとなった教師たちは自身の教師としてのやりがいを見つめ直し、自身の教師観を強化・変容させる契機となったことを口述した。しかし、本研究の調査によって、全ての教師が授業に専念できる環境や体育授業にやりがいを見出すことができるわけではないということが明らかとなった（図２）。そしてこの違いは、体育専科教師の適性を見る一つの視点となる可能性を示唆しているのではないだろうか。

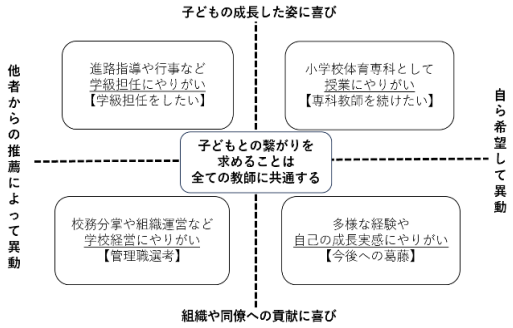

図２　小学校体育専科を経験した教師の教師観変容・強化の様

４　本研究における成果と課題

本研究において、専門性が高いとされる教師を配置されることすなわち、質の高い教育が実践されるということは結果として表出しなかった。むしろ小学校体育専科という経験を通して、教師は授業に専念することができるようになり、その結果として、自身の授業実践を省察したり、授業力量を形成したりしていくということが明らかになったのである。一方、専科を担う教師の教師観によって職務にやりがいを見出せないことも明らかとなった。以上の結果は、各学校が教科担任制を実施するその目的を考えることを放棄し、闇雲に実施率を上げようとすることへの危険性を示唆しているのではないだろうか。以上のことから、教科担任制の実施方法に関しては、各学校の目的、学校や子供の実態、教師の特性等に応じて、入念に検討していくことが求められるであろう。

最後に、量的な傾向や時間の経過に伴う教師の成長過程について詳細に明らかにできていない点は本研究の限界である。また、今後は子供たちや同僚教師、組織など多面的な視点から小学校教科担任制の効果や機能について検証をしていく必要があると考える。

５　主な引用・参考文献

①細越淳二（2023）小学校体育専科教員の役割と教員養成の在り方、日本体育科教育学会第 28 回大会課題研究シンポジウム資料
②鈴木聡「体育教師としての成長と教師教育」岡出美則・友添秀則・岩田靖編著『体育科教育学入門〔三訂版〕』、大修館書店、2021、p40-49
③四方田健二・岡出美則(2020)小学校教師の体育授業に対するコミットメントを阻害する要因の質的研究　日本教科教育学会誌、42（４）、p11-23